

2020年度しあわせ研究

「アートパラ深川」の対話的取り組みを通じた共生社会と人々のしあわせの実現

研究員 神吉宇一、上田欽一
松島直子、築瀬飛露
福島治、広瀬新朗



2020年11月15日～23日の9日間、江東区深川（門前仲町・清澄白河・森下）地域で、障がいのある方の絵画等を対象とした市民芸術祭、アートパラ深川（<https://www.artpara-fukagawa.tokyo/>）を開催しました。一部をしあわせ研究として取り組みましたので本稿でご紹介します。

アートパラ深川は、市民ボランティアによる運営によって2020年に初めて実現しました。9日間で7万人超の来場者がありました。コロナ禍でもあり、種々制約がある中で学内に広く呼びかけられなかったのは残念でしたが、筆者たちとJCの学生4名がしあわせ研究の一環として取り組みました。

しあわせ研究としての取り組みは、対話的活動を通して人々のつながりをつくり、多様性への理解や共に生きる社会の実現を目指すものでした。具体的には1) オンラインによる対話型アート鑑賞ワークショップ（<https://youtu.be/-LrK9GM-keQ>）、2) アートパラ深川公募展に応募し入選したアーティストへのメッセージ集め（例えばこのサイト https://padlet.com/u_kami/72hr

c7pvdpzqx66、紙でも収集してアーティストに郵送）、3) 地域づくりに問題意識をもつ人々による「フューチャーセッション」の実施に取り組みました。

1) 2) は学生が中心となって企画・実施しました。JC学科ではアクティブな学びを志向するためにプレゼミでワークショップデザインを行います。1) はその経験を生かした上で、さらに数ヶ月に渡ってファシリテーションの訓練を受け実現したものです。また、アート鑑賞の素材として公募展の作品を用いることで2) の取り組みと併せて、アートパラにリアル参加できない遠隔地の人々と作品・アーティストをつなぐことができ、障がいのある方の社会参加を一つの形として実現しました。3) の取り組みは筆者たちが中心となって行い現在も隔月で行っています。この取り組みから、江東区での日本語学習支援体制整備につながりはじめています。

アートパラの取り組み全体を通して、障がい者の作業所で製造しているお弁当販売が地域に広がり本学入試課でも購入してもらったり、ゼミ生が新たな学習支援教室の立ち上げのお手伝いをはじめたりしています（https://sdgs.musashino-u.ac.jp/product/multicultural_coexistence/）。江東区で暮らす多様な人々と関わる学生のしあわせを実現する試みとして、2021年度も継続して取り組んでいきたいと考えています。